

- ◇未完結なものとしての『神聖喜劇』(第10回例会報告) 1
- ◇不条理に抵抗する意志の底にあるもの——報告を終えて(杉山雄大) 2
- ◇再読で感じたこと 二つ、三つ(渥美博) 4
- ◇次期講座「大西巨人の批評を読む」に参加しよう! 5

未完結なものとしての『神聖喜劇』

——「終曲 出発」からの杉山雄大さんの問題提起

2020年3月21日(土) HOWS連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」の第Ⅲ期(2019年度後期)第3回「第八部 永劫の章(第四、終曲)」——東堂太郎のその後」が開かれました。1年間10回にわたって行われた講座の最終回になります。報告者は、HOWS受講生の杉山雄大さん、参加者は15人でした。

『神聖喜劇』は、「別の長い物語り」を予告する「私」=東堂太郎の言葉で締めくくられます。作品が直接の対象とする、教育訓練期間三か月は、自身の転心や回生の「胚胎」ではあってもすべてではない、と言う語り手の言葉から、杉山さんは、「未完結性」という特質を論じました。特に注目したのは、「我流虚無主義の我流揚棄」に対応する側面です。

「何を為してもよく何を為さなくてもよい」(1巻33ページ)という「主観的な定立(テーゼ)」は、抑圧的な時代状況の中で追い詰められた青年知識人東堂によって選ばれたものでした。しかし、軍隊に入った東堂は、伝えられていないことを「忘れました」と言え、という上官の強制に服することができません。「何か、ある重大な何か、私において最終的に崩れ落ち」(1巻73ページ)ることを回避するために、東堂は異議を唱えます。虚無主義を自己に当てはめながら、明瞭に名指されていないもののために発言する主人公のありようは、一見矛盾するかのようです。

「虚無主義にもかかわらず」(1巻87ページ)抵抗するという事態から、杉山さんは、背反する志向が一人の人物に共存する状態を見出し、小説第一作『精神の氷点』から連続的に形象が行われていることを提示しました。孤独な状況の中では、主人公(たち)は虚無主義からの脱却を果たすことができません。最上法源を天皇とするブルジョア法治主義にたたかいて挑む東堂にしても、限界を感じる局面がありました。『神聖喜劇』においては、他の作品と異なり、他者の言動が行き詰まりを打開する契機となっています。杉山さんは、「何物か」をめぐる反撥、あるいは「何物か」への希求がほかの登場人物にも見られることを示し、模擬死刑における冬木の抗議も含めて、東堂が「宗教的感情」と名づけていることを指摘しました。「別の長い物語り」を要請する未完結性は、他者との連帯によって虚無主義を超克する一方で、超越的な存在を呼び込むことを回避するために必然とされた方法ととらえることができます。杉山さんの報告は、作品全体を見渡しながら、明確に言語化されていない主題に迫ろうとした意欲的なもので、講座の締め括りにふさわしいものでした。

質疑では、「宗教的感情」をめぐる、「来世の不存在を承認しつつ、なおいかにして宗教的な心構えを復興するか、が真の問題だ」(ジョージ・オーウェル「アーサー・ケストラー」。訳文は、『迷宮』「第

三章／一」より) という言葉とどう関連するのか、「悟性」とは異なるものなのか、などがまず問題になりました。「我流虚無主義」については、東堂が退嬰的な心情に陥った歴史的な文脈についてや唯物論との共通点が問われました。「未完結性」からの連想で、話は、大前田軍曹による東堂の制裁、大前田の逃亡および逮捕、堀江隊長の東堂への挿話の役割に及び、知識人と庶民との知のあり方の違いや東堂における儒教の影響についても意見が交されました。二時間を費やしても議論が尽きなかったことは、講座を通して参加者の理解が深まり、大長編が追究した課題を実践的に考えようとする意欲がいよいよ高まったことの現われのように感じられました。

不条理に抵抗する意志の底にあるもの

――『神聖喜劇』第八部「永劫の章」の報告を終えて

杉山雄大 (HOWS 受講生)

『神聖喜劇』の主人公である東堂太郎は、治安維持法により「左翼反戦活動」の容疑で検挙され、被拘禁生活を強いられた後、証拠が不十分であるとして釈放された過去を持つ。社会変革の可能性を奪われ、無力感に陥った東堂は、自身を虚無主義者であると規定し、「世界は真剣に生きるに値しない(本来一切は無意味であり空虚であり壊滅するべきであり、人は何を為してもよく何を為さなくてもよい)」と考える。しかし、教育召集によって対馬の重砲兵聯隊に配属させられた東堂は、軍隊内で直面した上官の不条理な命令に服することを「自身に許すことができな」かった。東堂自身も認識しているように、この命令への抵抗は、「人は何を為してもよく何を為さなくてもよい」という彼の虚無主義と明らかに矛盾しているようにみえる。だが、それでも東堂は事実として上官の命令に抵抗してしまっただけであり、この後もそうした姿勢を貫くのである。東堂の抵抗は、彼自身の予想をも裏切るものであったといえるが、虚無主義を超える一歩が唐突に踏み出されるこのような場面は、大西巨人の出発期の小説においてもみられるものである。

巨人の小説第一作『精神の氷点』の主人公である水村宏紀もまた、東堂と似た虚無主義を抱えた人物である。軍国主義的な傾きを強めていく社会情勢のなか、既存の革新勢力の転向や、当時翻訳されたシェストフの書物などの影響により、水村は「この世には掟もなく道もなく、意味も価値も存在しない」という虚無主義的な思考に陥る。その後も社会主義文献の読書会や人民戦線運動に参加するが、結果的に大学を追われ、挫折を強いられることで、彼の虚無主義は決定的なものとなる。ただし、水村の虚無主義は、天皇を超越的な高みへと持ち上げることにたいする抵抗としての側面を持つため、彼のマルクス主義的・唯物論的な思考がねじれた形であるともいえる。敗戦を迎えてもなお、水村は人間性への信頼を失っているため、虚無主義から脱却することができない。しかし、水村は復員後の生活を「果てもない思念と悪夢とに憑かれて過すうちに」、「抵抗するすべもない虚無」を超えて「なほ「何か」意味あるもの・価値あるもの」が存在するという予感を得る。このときの水村の心情は、「彼は神を信じなかつた。(中略)が、この頃の彼の心は、まさしく「エホバ言ひたまひけるは汝何をなしたるや、汝の弟の血の声地より我に叫べり。されば汝は詛はれて此の地を離るべし、此の地其の口を啓きて汝の弟の血を汝の手より受けたればなり。汝地を耕すとも地はふたたび其の力を汝に至さじ、汝は地にさまよふさすらひ人となるべし。」といふ呪詛と追放との声に打たれたもののやうな、何ものかへの深い恐れに満ちてゐた」と記されているが、その契機となった物事が説明されていないため、唐突な印象を受ける。

小説第二作『白日の序曲』の主人公である税所篤巳も、反戦的な文化運動に参加したことで退学させら

れ、ドストエフスキーやニーチェの思想に影響を受けることで、「この世には愛も希望もあるはずはなく、何を行つてもよければ、何を行はなくてもよい——彼にとって「一切は許されて」みたのであつた」という虚無主義的な思考に陥る。戦時中、虚無主義に基づいてあらゆる非人間的な行いを正当化し、澄江という少女をもてあそんだ過去を持つ税所は、現在においても自身が虚無主義から脱却できていないと考え、敗戦後に出会った瑞枝という少女との恋愛にためらいを覚える。しかし、小説の結末において税所は、虚無主義者である「にもかかはらず、おれはさういふおれとして、或る大い肯定の、夜を包容する白日の、ただなかに飛躍し突進しなければならない」という結論を得る。そして、「ある何か」が彼の内部において生動すると、「大い苦悩と恐れとを湛へたままに、彼の顔面は或る不思議な遠い憧れを帯びて輝く。虚無主義を保存したままの不安定な状態で回心を遂げる点や、唐突に出現する「何か」への「恐れ」の感情が回心の起点となっている点で、水村と税所の回心の場面は似ている。こうした特徴からは、虚無主義からの脱却を、既存のヒューマニズムへの直線的な移行として描くことを避けようとする意識と、ヒューマニズムを改めて分析し、その中心を「何者か」への「恐れ」という心情に還元することで、新しく構成し直そうとする意図とがうかがえる。

敗戦直後の時点を描いた巨人の出発期の小説と、戦時下の軍隊を舞台にした『神聖喜劇』とでは、自ずから状況が異なるとはいえ、主人公が虚無主義からの脱却を遂げていく場面が、いずれも唐突であり、不安定さを帯びている点で共通している。さらに『神聖喜劇』では、虚無主義を抱懐しつつ軍隊内の不条理に抵抗し続けることの矛盾を、東堂自身が意識し、分析していくのである。学生時代におけるマルクス主義思想の受容や、古今東西のさまざまな文芸作品の読書、また、父に教えられた武士道的な精神に由来する倫理的志向など、自身の教養形成を辿ることで、東堂は、虚無主義を超えて価値判断を行い、行動を起こしていく自身の原動力のありかを探る。やがて東堂の虚無主義は、他の新兵とともに軍隊内の問題に取り組み、公正な議論を積み重ねることによって薄らいでいく。それぞれの立場を持つ民衆の意見や態度に接し、相互に影響を与え合い、価値判断を共有していくことで、虚無主義の持つ消極性や独善性が克服されていったのであろう。また、第八部「永劫の章」第三「模擬死刑の午後（結）」で、人間の生命の価値と非暴力の思想の主張へと新兵の冬木を駆り立てたものを、東堂は「宗教的感情」という概念を用いて分析している。それは各人の教養や経験などが総合的に形成する「向日性」を示す概念であり、ヒューマニズムの基盤となる精神的な志向であるといえる。その内実を歴史的かつ多角的に分析することが、『神聖喜劇』の主題の一つであったのであろう。こうした試みは、虚無主義からヒューマニズムへの移行を新たな価値判断基準の生成過程と捉えて慎重に描き出そうとした出発期の小説の成果を引き継ぎ、より具体的かつ歴史的な観点から展開しようとしたものとして位置づけられる。

以上は、今回の報告について改めて考え、整理し直したものである。報告では、東堂の虚無主義からの脱却の過程を、巨人の他の小説との比較を通じて理解することを目指したが、主題の大きさと問題の複雑さとに直面し、中途半端なものとなった。当日の討論では、東堂の虚無主義の具体的な形成過程とその背景についての問題や、虚無主義と唯物論とのそれぞれの定義についての問題などが質問としてあげられた。また、東堂におけるナショナリズムと武士道的な倫理と「宗教的感情」との関係性の問題が、当日の議論を通して検討された。これらの問題について具体的に調査し、検討することが、今後の自分の課題となる。

一年余りかけて続けられた HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」が終わった。三〇数年ぶりの再読であったが多くのことを学ぶことができた。アドバイザーの立野正裕さん、山口直孝さんのご尽力のもと、より若い世代が中心となって講座を運営し、一講座ごとにニュースを発行するという大切で、大変な仕事をやってくれた。その面でも大いに収穫があった。

3月21日最終講の杉山雄大さんの報告は我流虚無主義におちいった東堂の「私は、この戦争に死すべきである。」から「私は、この戦争を生き抜くべきである。」への転心の過程を、作品（全五巻にわたって）に沿って丁寧に追ったものであった。東堂を「向日的な感情や衝動」（「報告レジュメ」）へうながしたものは何かを明らかにした。

大西巨人は『神聖喜劇』の最終に、東堂のその後は「別の長い物語りでなければならない。」と書いている。報告者は著者が物語りを未完結の形で終わらせていることを指摘し、次のように話した。「こうした未完結性は、スタティックな結論による思考の停止を避けるための措置であり、『神聖喜劇』の末尾にふさわしい」（「報告レジュメ」）と。報告者のこの考えに賛成する。さらに言えば、東堂の生きた兵営生活は決して特殊な世界ではなく、東堂のかかえた問題意識や実践課題は現代を生きるわれわれのものでもある。東堂のその後の物語りをわれわれの物語りにしなくてはならないとなるのであろう。

今回再読して感じたことをいくつかあげてみたい。

『神聖喜劇』は著者「奥書き」によれば「1955年2月28日深更にその稿を起し、1980年正月8日午前にその稿を脱した。」とある。1921年、『種蒔く人』の創刊によって日本におけるプロレタリア文学運動は出発した。半世紀余りの歳月を経てわれわれは日本の革命文学の偉大な成果を手にしたことになる。『神聖喜劇』はプロレタリア文学（＝革命文学—当時は革命という文字を使うことを禁じられていた）運動、戦後の『新日本文学』を中心に展開された民主主義文学運動の延長線上に位置するものである。『神聖喜劇』が向こう側に行ってしまったと言うのではないが、運動の側に改めて位置づけるために言わずもがなのことを一言したのである。

次に東堂の人格・思想形成についてである。東堂太郎は父親の影響で幼いころから儒学に親しんだ。少年期から青年期にかけて欧米の文学、諸思想を吸収し、 Kommunismus を自己のものとした。東堂の考えの底辺には儒学、そこからくる武士道精神的なものがある。東堂の生き方の姿勢や価値判断がそこから出てくるのがまある。東堂は吉田松陰や会沢正志斉に肯定的である。彼らは日本の近代国家成立を準備した革命的思想家であり、一方でその攘夷思想は日本のナショナリズムの根幹となったものである。東堂は日露戦争の激戦を歌った森鷗外の『うた日記』に少年時代から愛着してきた人物としても描かれている。勿論東堂はナショナリストではない。その対極に位置しようとしている人間である。東堂には「ナショナル」な部分が色濃くある。東堂のその部分が「合せ鏡」的存在である「純潔」昭和維新的青年将校村上少尉に照応する。

大西巨人も幼少期父親から儒学の薫陶を受けたはずであり、東堂は作者の成長過程、体験にもとづいて形づくられているはずである。筆者もうかつにも日本人の小説読みの悪弊におちいって、いつのまにか東堂と作者と重ねて読んでいた向きがあった。あくまでも東堂は大西巨人が創造した人物である。東堂に色濃く感じられる「ナショナル」な側面も作者によって創造されたものである。東堂のような思想形成をへた人物が、これまでの日本のプロレタリア文学、民主主義文学に主人公として登場したことがあったであろうか。

1964年に京都大学の第18回河上祭（河上肇を記念した集り、毎年開催）の記念講演会で講演者の一人として中野重治が話した。その講演用のメモ（『中野重治訪問記』松尾尊允著、所収）に「『ナショナル』の問題（今日—64年）、コレと戦うためにも、コレから脱れるためにも、／国民的・民族的を社会主義と結びつけるため」と書かれている箇所がある。中野のこのような問題意識は1934年に転向し、そのすぐ後に書いた「村の家」の中で、主人公勉次の父親孫蔵に「共産党が出来るのは当たり前なこと、しかしたとえレーニンを持ってきても天皇のような魅力を人民に与えることはできぬ」と語らせたときから芽生えたものと筆者は考える。戦後第一作目の小説である「五勺の酒」でも主人公の校長をとおして中野はこのテーマを追究している。大西巨人も叙上の中野のかかえたのと同様の問題意識を持って『神聖喜劇』を書いたのではないだろうか。東堂と村上の岐路はインターナショナルな視点を持つ可否にかかわっている。インターナショナルな立場に立ってナショナルなものを止揚していくことはわれわれに課せられた大きなテーマである。

最後に民衆的兵士たちの生き生きとした存在感にふれたい。「人非人でもあり『人間的な、あまりに人間的な』男でもあるような日本農民下士官」（テキスト五巻478頁）、さらにつけ加えるならば、農民的リアリスト、反骨心の所有者、軍曹大前田文七の存在感。ガンスイ村崎古兵、陰で東堂をささえ、模擬死刑の場で東堂、冬木につづけと助教の立場でありながら教育兵たちをうながした村崎一等兵。しかし、作者は村崎をただ理想的に描くことはしない。「模擬死刑」事件で最も厳罰を主張した『清廉潔白』ないし『誠実純粹』の言わば『当世（最新）帝国主義』（テキスト五巻331頁）者村上少尉に最後まで敬意を失わない人物として村崎を描いている。被差別部落民、「前科者」（その実は正当防衛、傷害致死）、たとえ正当防衛であったとしても人ひとりの命を奪った者として、暗く、沈潜した思考の果てに「はい。鉄砲は、……」「前とかうしろとか横とか向けてよりほか撃たれんとじゃありません。上向けて、天向けて、そりゃ、撃たれます。」（テキスト五巻318頁）の「絶唱」に到達した冬木。「隠坊」であることを名告り上げた橋本の持つ楽天性。ほかにも白水、室町、曾根田、鉢田、仲原など東堂の愛すべき食卓末席組の仲間たち。しかし作者は彼らを多くの誤謬と矛盾をかかえた存在としてとらえており、決して理想化してとらえていない。

西欧的近代思想、コミュニズムを身につけた「インテリゲンチヤ的」活動家、変革者、革命家が一方的に前近代的な、無知蒙昧な民衆をオルグし、めざめさせていくといった、よくみられるパターンとは『神聖喜劇』は無縁である。東堂はたとえば仲間の部落差別意識と慎重に、真剣に向きあい、その誤りに気づかせようとする。その一方で東堂を我流虚無主義の淵から「向日性」を回復させた重要な要因として、食卓末席組の面々（めんめん）が持っている民衆的な楽天性や鈍重な強靱さに励まされたことをあげることができる。作者は近代意識の篩（ふるい）にかけて民衆をとらえてはいない。だからこそあのような魅力的な民衆群像を描き出すことができたのであろう。

次期講座「大西巨人の批評を読む——『戦争と性と革命』『文選』などの諸論文から」に参加しよう！

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」は、3月21日で全10回の日程を終えました。14か月をかけて大長編を精読し、議論することを通じて、状況に抗する意識のはぐくみ方や持続のさせ方、他者との連帯形成の道行き、唯物論を突き進めることで生じる思考の限界点など。重要な問題群がより具体的かつ実践的に把握できるようになったと思います。

8月からは、次期 HOWS 講座「大西巨人の批評を読む——『戦争と性と革命』『文選』などの諸論文

から」が始まります。今度は、「俗情との結託」ほか大西巨人の代表的な批評文を取り上げ、批評対象や当時の状況などを確認しながら、現在性に迫っていきます。前期の予定は、下記の通りです。

- ①8月29日（土） 「あけぼのの道」を開け
——『あけぼのの道』を開け（1946年）などの諸論文
報告=HOWS受講生
- ②10月3日（土） 俗情との結託
——「俗情との結託」（1952年）などの諸論文
報告=HOWS受講生

引き続きご参加ください。持続する反逆の精神、革命の精神を共に学んでいきましょう。